《留学体験記》

自分に《資格》はあるのか
——再びのドイツ滞在経験から——

林　祐一郎

「ちょっと語学学校へ通ったぐらいで海外を知った気になる人がいるんですよ」。ドイツ滞在中に、こんな日本語を何度か耳にしたことがある。筆者は当初、この揶揄を他人事だと思っていた。すでに筆者は何度も外国であるドイツを訪れ、半年間の交換留学すら経験していて、海外の友人たちも少なくなかったからだ[1]。そもそも、日本に生きる多くの人々にとって、海外滞在は長い人生を彩る数々の想い出の一幕に過ぎず、外国の文化や慣習について自分自身の目で判断する材料は短期間の特異な旅行体験くらいしかない。それをもとに外国事情を語る人がいれば、その人が浅い知識で物事を理解した気になっているように見える、というのが実情だろう。

それはまた、今から 9 年前に初めて国外へ出てドイツを訪れた筆者とて同じことだった。2015 年 8 月にハンブルク大学アジア・アフリカ研究所の夏期語学講座へ参加した後の体験記を読むと、筆者がいかに「ちょっと語学学校へ通ったぐらいで海外を知った気」になっていたかが窺える[2]。その後、筆者はドイツ滞在を断続的に積み重ねていくこととなるのだが、滞在を繰り返すうちに、いくらかその理解が深まった一方で、自分の無理解も益々露わになった。そんな筆者に専門家としての《資格》はあるのか。それがこの一年間に付き纏った問いである。

外国語を教える資格はあるのか

筆者は昨年 4 月より、学校法人北白川学園の夜間講座「山の学校」にてドイツ語講師を務めている。海外からでも対応可能な遠隔授業、真面目で熱心な生徒さん方、融通の利きやすい少人数体制と、非常に恵まれた環境での仕事である。筆者が「先生」と呼ばれるのは、公的にはここが初めてだろう[3]。しかもそれは、長年愛好しつつも悪戦苦闘してきたドイツ語の先生としてである。しかし、「現地の日常会話ではこう言われている」「学術的な文章ではこう表現されている」などと訳知り顔で語る自分の姿に、筆者は一種の滑稽さを見出さずにはおれなかった。

確かに、世界中の大多数の人々に比べれば、ドイツ語を知っている方だろう。曲がりなりにも大学入学以来ドイツ語に付き合ってきたわけで、全くの初心者よりも不得手ということはない。たとえ多少不安定だったとしても、20 代前半のうちは「まだまだこれからだから大丈夫」という慰めを単なるお世辞だと受け取ることはなかった。しかし、10 年以上の学習を経て三十路が数年後に近づき、ドイツ語の先生まで務めるようになった今、この程度の語学力と指導力で良いのだろうかという不安が浮かび続けている。

さらに、日本の高校など中等教育機関で第二外国語としてドイツ語を教えるための教員免許は存在するものの、高等教育機関では大学側の応募要件にさえ合致すればドイツ語教員として採用されることがほとんどで、ましてや民間のドイツ語講座なら無免許で働けてしまう。講読を主宰する教員のほとんどは、外国語の教授法を理論的に学んだわけでもない

1　拙稿「《留学体験記》「灰色の都」で出逢った人々——冬のベルリン長期留学体験記—」『フェネストラ——京大西洋史学報—』第 4 号、2020 年、53-58 頁。

2　拙稿「2015 年度　語学留学レポート（ドイツ　ハンブルク大学）」、https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/education/study_abroad/report/2015/dqsagf, 2024 年 3 月 31 日閲覧確認。

3　拙稿「《先生》と呼ばれて—2023 年度春学期ドイツ語初級・講読授業実施報告—」『山の学校 weblog』2023 年 9 月 3 日、https://yama.kitashirakawa.jp/yama-blog/?p=65760, 2024 年 3 月 31 日閲覧確認。

だろう。現役時代に実績のあるプロ野球選手が、体系的に指導法を習得することなく、引退後にそのまま指導者へ転身するのと似ている。何かを教えるにはそれを学んだという経験が必要だが、それだけでは不十分なはずである。

筆者は、大学教員に免許制を導入すべきだと言いたいわけではない。あくまで自分自身の問題として、他人に教えられるほどドイツ語とその教授法に習熟しているのか、という懸念があるのだ。何度かドイツ滞在を重ね、今回に至っては一年間も滞在したおかげで、筆者のドイツ語力は相対的には改善されたし、その知識を他者に伝達できる程度には増やせたと思う。しかしながら、日常会話が長くなると続かなくなったり、大学の講義や教会の説教の内容についていけなかったり、相手の言っていることを誤解していたりするのは日常茶飯事である。留学生向けのドイツ語講座では実力不足と臆病さゆえに学習機会を充分に活かせず、作文や原稿の校正でも表現や文法を大量に直されていた。文法や表現の微妙な違いを上手く説明できなかったり、自分の作ってきた訳よりも生徒の作ってきた訳の方が正しかったりすることもあった。

筆者は様々なところで常々、母国語へ逃げるのではなく外国語に挑戦し、国際語ではなく現地語を使用して、滞在先の研究者や地域住民たちとじかに交流するべきだと言ってきた[4]。むしろ外国史研究者こそ研究対象や現地社会の中へ分け入るべきだというこの主張を大筋で曲げるつもりはない。だが、筆者にそれを発言する《資格》はあるのだろうか。周囲には、海外で正規入学し、難解な演習や課題に挑んでいる同世代や、入学先で長大な論文を出版し、博士号を取得した先輩方も存在する。筆者は結局のところ、半端な《中間者》である。そうした語学能力の低さゆえに、現地事情にも疎かったと言わざるを得ない。

世界情勢を語る資格はあるのか

今春に帰国して京都を訪れた際、筆者はあるキリスト教会の集まりで、図らずも今回のドイツ滞在について話す機会を与えられた。そこでは、自分が取り組んできたドイツ・ユグノー史研究と日本における福音主義伝道史研究、滞在先で通っていた福音主義領邦教会系のベルリン大聖堂と日本基督教団系のベルリン日本語教会、一年間のうちに進行した深刻な円高と物価高、ドイツの経済状況が日本で称揚されているほど良くないということについて、10 分ほど話した。その後の質疑応答では、滞在中の旅行について尋ねられ、筆者がルターの町ヴィッテンベルクを挙げると、同僚としてルターに協力したフィリップ・メランヒトン Philipp Melanchthon（1497-1560）や、同地でドイツ福音主義教会大会を主導したヨハン・ヒンリヒ・ヴィッヒャーン Johann Hinrich Wichern（1808-1881）にも話は及んだ。

しかし、聴衆の大きな関心は、ウクライナやパレスチナに関するドイツの態度にあるようだった。ウクライナについては、ドイツの街頭では公共施設にウクライナ国旗が掲げられていること、全体的にはウクライナに同情する空気が強いものの、平和的交渉か軍事的支援かという紛争解決の手段は議論を呼んでいること、他方でドイツ、とりわけベルリンには数多くのロシア系住民が存在すること、筆者の友人にも複雑な心境を抱えたロシア系ドイツ人がいることを話した。パレスチナについては、連邦政府が歴史的経緯ゆえにユダヤ系のイスラエルには公然と抗議しにくいこと、親パレスチナの動きはともすると反ユダヤ主義に結び付くこと、それゆえにパレスチナを擁護する示威行動が政府によって規制されてしまうこと、それでも政治的自由の余地がある程度確保されたドイツでは街頭やインターネットで両陣営の宣伝合戦が繰り広げられていることを話した。この回答に質問者が納得したのかどうかは分からない。もしも質問者が白か黒かという明確な答えを求めていたのなら、この説明だと不満なはずだ。分かりやすい結論を早急に出さないのは、「誠実」な歴史家の典

---

[4] 例えば以下を参照。拙稿「「灰色の都」からの便り―もう一度迎えるベルリンの秋―」大阪日独協会編『Der Bote von Osaka. Berichte der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Osaka e. V.』2023 年 12 月 18 日、https://bote-osaka.com/yomoyama/2023/12/1338/, 2024 年 3 月 31 日閲覧確認。

型である。

事実、筆者の周囲では様々な意見が聞かれた。数年間ドイツに住んできたある日本人音大生は、決してロシアが悪くないというわけではないが、元々支持率の低かったウクライナのヴォロディミル・ゼレンスキー大統領も外交に失敗して戦争の一因を作ったのだと非難した。また、あるウクライナ系のドイツ社会民主党員は、ソ連時代にモスクワへ留学したことを懐かしみ、未だに流暢なロシア語を使用することがありながらも、同党所属のオラフ・ショルツ連邦宰相が長期政権を築いた先任者アンゲラ・メルケルの「待つ」政治を意識し過ぎて、積極的な武力支援に及び腰であることを嘆き、ウクライナのＮＡＴＯ加入手続きはいつ完了するのかと野党・キリスト教民主同盟所属の政治家に迫っていた。普段は仲の良さそうなドイツ人と日本人とのある二人組は、会食中にウクライナ紛争の解決方法、すなわち平和的交渉優先か軍事的支援優先かを巡って口論となり、歴史学研究者である筆者に是非を問おうと詰め寄ることもあった。

筆者が通っていた教会のグループチャットでは、ある教会系の国際団体がパレスチナ紛争について曖昧な立場を示し、テロ組織ハマスによる先制攻撃を明確に名指ししていないことが、ユダヤ人たちに対する残虐行為を相対化する見方だとして批判を浴びていた。滞在先のベルリン自由大学では、ユダヤ系の学生が都心部で親パレスチナの学生に殴打され、ユダヤ系団体が後者の除名を求める中、この処分を巡って大学当局が対応に追われた。ベルリンは本当の意味での戦場ではないものの、こうした国際紛争のキナ臭さを感じるには充分な場所である。

大学の外で学問研究と直接関係のない知人と接すると、筆者は国際情勢の解説、果てには外国史専門家としての意見表明を求められることが少なくない。だが、前者の要求に関してはそもそも筆者自身の知識が心許ないし、後者の要求に関しては不用意な発言ができない。それでも、専門外の人から見れば筆者は外国事情に詳しい者と映るのであって、会話を活性化するための単なる話題作りでもないとしたら、何らかの知見を求めて頼んでいるのだろう。ここで示唆を与えられなければ、何のために歴史学を通じて知識を養ってきたのかも分からない。しかし、まだまだ勉強不足の筆者に、答えになっていないような答えしか出せない筆者に、国際情勢を語る《資格》などあるのだろうか。眼前に広がった世界に対する自分自身の主体的な考えが明確でないという点で、筆者は研究者としても問題があるのかもしれない。

研究者を名乗る資格はあるのか

大学院生、とりわけ博士後期課程の院生というのは、学生の延長とも呼べるし、若手の研究者とも呼べるだろう。学生証を持たせてもらえるから大学の外では学生割引を享受できるし、収入が安定しないために親族からの支援を頼りにせざるを得ないこともある。その一方、博士論文執筆までの過程で自ら論文を書き、自身の研究を一応は世に問うことになるわけだから、精神的には自立した研究の主体でもあるはずだ。そうした曖昧な立場ゆえに、筆者は「大学院生」と名乗るべきか、「若手研究者」と名乗るべきか、その場に応じて使い分けなければならない。ただ、「研究者」と号する場合、やはりそれなりの自負は必要である。

今回の滞在で筆者は、ベルリン自由大学フリードリヒ・マイネッケ研究所の「客員研究員 Gastwissenschaftler」として受け入れられた。要は、「学生」や「院生」ではなく、まずもって「研究者」としての受け入れである。学生証は配布されなかったが、客員研究室内に自分の机とデスクトップパソコンを与えられ、大学図書館の利用も許されるという待遇だった。受入教員のアレクサンダー・シュンカ教授は、筆者を「留学生」ではなく「研究者」の一人として扱い、筆者の口頭報告や研究内容を自身の講演で引用することも厭わなかった。教授が筆者に公然と敬意を示してくれたことは嬉しかったものの、筆者はそれに見合った人物なのだろうかという疑念は自分の中で残り続けている。

蓋し、「研究者」とは、従来の知見の単なる継承や輸入や普及に努める者ではなくして、

それを批判的に吟味しながら新しい知見を生み出していく創造者であるべきだ。もっとも、独創性を突き詰めたところで、実際には誰かがすでに見出していたことを別の表現で言い換えているに過ぎないというのはよくあるだろうが、規範としてこの志は大事なはずである。しかし、筆者は「従来の知見」に関する知識も浅薄であるばかりか、新しい知見を生み出せているかどうかも心許ない。だから、筆者は「研究者」と自称することに躊躇いを覚える。ただ沢山の書籍を所有し、対象となる地域に滞在し、一次史料や研究文献を探して読み、同業者たちの前で定期的に口頭報告をして、書評や論文の業績をいくらか積み上げていくだけでは、体裁だけは立派な「研究ごっこ」ではないのか。

「研究ごっこ」などという揶揄は言い過ぎかもしれない。しかし、そう自嘲したくなるほど、自分には何か本質的なものが欠けているという感覚があるのだ。自分の練り出した議論がどれだけ確証のあることで、しかもこれまでの研究を多少なりとも刺戟するものになっているのか、本当に自信がない。筆者は日本学術振興会の特別研究員という肩書にも恵まれたが、それは結局のところ肩書に過ぎない。現地人研究者や外国人留学生、他の日本人院生たちの働きぶりを横目に眺めていると、ますます自分が恥ずかしくなる。そうした実力不足が気になって、研究者と名乗る《資格》などないように思えてしまうのだ。

海外に滞在していると、何のためにここへ来たのかと尋ねられることが多い。大抵、筆者はドイツ史を勉強しているのだと答える。すると、どういう身分でここにいるのかと尋ねられるから、筆者は「客員研究員としてベルリン自由大学（FU）へ受け入れられたのだけれど、本来は京都の博士課程院生なんだ Als Gastforscher wurde ich in die FU aufgenommen, aber eigentlich bin ich Doktorand in Kyoto」などと答えてきた。はっきりと研究者だとは名乗らず、院生という自称に拘るのは、自信のなさの表れである。

それに対して、大学のドイツ語講座で仲良くなったアルゼンチン出身の歴史学者アマデーオ・ガンドルフォ博士 Dr. Amadeo Gandolfo は、初対面の際に筆者が歴史学専攻であることを知って、「僕の職業は歴史家だよ Ich bin Historiker von Beruf」と語っていた。もっとも、彼があまりよく考えずに喋っていたのか、本当に一人の歴史家としての矜持があるからこう言ったのかは判然としない。しかも厳密に言えば、「歴史学研究者」と「歴史家」とは異なった概念である。しかし、その両者はともに、一定の自覚がある者にこそ相応しいものだろう。筆者が自信をもってこう自称できるようになるためには、あとどれだけの時間と労苦が必要だろうか。

先行研究や調査結果に対する個々人の立場が不明瞭なまま、ただ従来の知見を紹介したり事実を整理したりするだけで、それを「研究」と呼んで良いのか。外国語や手稿が正確に読めるとか、多種多様な史料によって実証性が担保されているとか、学問的水準が云々と言っているのではなく、それらは手続きや方法論の問題であるから、ここでは本質的な論点ではない。まずは一人の学究者として、何か物申したいことを持つべきではないか。自分の営為を「研究」と称せるかどうかはそこに懸かっているのではないか。

歴史学研究に携わっていると自負する者が、不十分とみなした営為を「研究ではない」と難じるとき、それは研究者の肩書を持つ人々にとっても決して他人事ではない。

なるほど、何かを教授することも、何かを解説することも、何かを名乗ることも、本人の覚悟が固まっていないうちにせざるを得なくなるのだろう。特定の分野についてある程度の知識があれば、収入や教歴を求める際にそれを活かそうと考えるのは自然である。周りに求められれば、自分で出来る限りの説明をしたいとは思う。世の中の多くの学生は、自分が就く職業のあるべき姿などじっくりと考えられないうちに、何らかの職位を示した名刺を持ってしまう。数ある職業のうちの一種に過ぎない研究職を特別視するという、高踏的な考え方が柔軟な思考を妨げているのかもしれない。いずれにせよ、実力や内容などというものは大抵、後から追いついてくるものだ。

この一年間、これまでとは全く違った環境で、ゆっくりと物事を考える時間が増えたことで、外国史を専攻する大学院生としての自分に何度も向き合った。何かをする《資格》があるのかどうかと思い悩んだところで、研究内容そのものに大きな進展はないし、成果を生み

出す速さは落ちてしまう。しかし、こうした煩悶の過程を少しでも経た方が、良い論文は書けそうな気がする。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)